

第2分科会（外国語教育）のまとめ

報告者 関山 信雄
(釧路商業高校)

今分科会にはここ数年の数を大きく上回る9本の実践レポートが発表されました。その概要と討論の中で出された成果と課題をまとめて報告します。

☆紙上再現「文法の授業」：関山信雄（釧路商業高校）

報告者関山のレポート。基礎的な文法知識をほとんど身に付けられないまま高校に入学してきた生徒たちが、どうしたら前向きに英語に取り組み、学んだ英語を使いながら、「わかった」と実感させることができるか。「to不定詞」の指導をテーマに、導入からペアワークに至るまでの授業の実践を再現した。生徒の身近な視点からの導入と相手に伝えることを主眼としたペアワークを取り入れることにより、多くの生徒が、to不定詞の用法をコミュニケーション活動の中で体感することができた。討議では、日本語からの用法の分類だけでなく、toが持つcore meaning（「向かっていく方向を表す」）を意識させていくのも有効なやり方だとの意見が上げられ、文法指導の新たな視点が明らかになった。

☆大学入試の「四技能」化における地域高校の英語学習の現状と課題：徳長誠一（北見北斗高校）

2020年から導入される大学入試における英語の民間検定試験。その主眼は「四技能」を総合的に判定することである。その対応に向けた実践と都市部から離れた「地方高校」の現状と課題が報告された。徳長氏の授業実践の中心は4人グループを基本とした学び合い、協同学習である。「背伸びとジャンプ」の観点で課題の難易度を変化させながら、話し合いと協力によって、生徒同士で課題解決をはかっていく取り組みを行っている。また、パワーポイントをはじめとするICTを活用した授業技術は、教員の教材作成の労力を軽減し、生徒の集中力を高めることにも有効であるということを実例により明らかにした。最後には、「四技能化」が地方の高校にとってどれほど人的、経済的に負荷がかかってくるのかが具体的に明確にされ、早急な対応が求められることが共通認識された報告であった。

☆生徒の意欲を高める授業づくりを目指して～ALTと協働して～：笹原昌子（瀬棚中学校）

生徒たちが生き生きと取り組んでいける授業を、ALTとともに作り上げていく実践レポート。英語で調理実習にチャレンジさせていく過程の中で、ねらいとする文法や語句をしっかりと意識させながら、世界の国々と日本文化の調べ学習からpresentationに取り組みさせる。そして、各国の特徴的な料理を、ALTが作った英語のレシピを解読しながらの調理活動。難解な英語に四苦八苦しながらも、まさしく生徒のチームとALTが協働して目標達成を目指して生き生きと取り組んでいく姿が浮かび上がっていた。さらに、料理の完成だけにとどまらず、語句や食卓での会話などをていねいに提示し、生徒たちに最後までコミュニケーション活動の場面を提供していく。まさしく、笑顔に満ちた実践であった。

☆反省と感謝、そして新たな学習指導要領へ：櫻井貴幸（滝川市立江陵中学校）

優れたALTとのチームティーチングの実践報告。非常に多才で生徒と楽しむことが大好きなALTが、市販品と見まがうような見事なワークシートを作成し、授業でのプレゼン用教材もJLTと生徒のニーズにぴったりマッチするものを作り上げるという、垂涎の取り

組みが紹介された。

☆楽しく「わかった」と実感できる授業づくりをめざして：犬上達也（富良野市立樹海中学校）

定年後の再任用として、全校生徒20名の中学校に赴任し、そこでの実践の数々を報告したレポート。犬上氏は「楽しく」「わかる」授業づくりを第一に考え、英語の歌に取り組みさせている。そのねらいと効果はしっかりとした理論に基づいていることを明らかにし、これまで取り上げてきた歌を紹介しながら、生徒に「なるほど」と思わせる指導法を示した。また、教科書例文の暗唱や、ICTの活用など、まだまだ、新たな取り組みが可能であることを報告した。また、犬上氏の小学校外国語活動への支援活動の経験をもとに、小学校の教科化に向けた取り組みやこれからの課題についてもいねいな資料とともに説明され、今後検討すべき課題の大きなヒントとなるレポートであった。

☆本校の英語教育の目的を考える：野村健治（札幌東商業高校）

トップダウンで現場まで推し進められてくる英語教育政策。その意向に沿う形で教育課程を策定しようという流れを押しとどめるために、様々な資料を提供して、同僚英語教員に本質的な英語教育の目的をともに考えていくきっかけを作り出す取り組みの報告。野村氏は、全体に提起された基本方針のひとつひとつに対し、生徒・保護者のアンケート結果から見える実態や、ユネスコ勧告や学術会議の提言など、多方面からの視点を明らかにしながら、真摯に英語教育の目的を考えていくということに対して、共感を作り出していく過程を紹介。多岐にわたる資料の読み込みもさることながら、揺るぎない理念に裏打ちされた英語教育観を持つことの重要性を確認できたレポートである。

☆教科書を創造的に扱う工夫について：野村健治（札幌東商業高校）

野村氏は教科書の内容から得たインスピレーションで、生徒たちにその深化ををはかっていく取り組みを紹介した。写真を扱った課の後には、生徒たちが自分の好きな写真や絵とその解説文を英語で書いたレポートを作り、それに対し全生徒がコメントの英文を返す。オバマのスピーチを扱った課では、オバマの広島でのスピーチに対する意見を英語で書かせる。アニメのキャラクターを学んだ後は、生徒たちのオリジナルのキャラクターを発表の後、相互評価をさせる。いずれも生徒たちの社会に対する視線が如実に表れた成果が感じられる取り組みである。そして、野村氏が深く影響を受けた教育実践を自らの英語授業に再現した「人間とは何か」を深く考えさせ、それを言葉にし、共感していく実践。難解な切り口にも、生が集中して取り組む姿がはっきり見てとれる、奥深さのある実践報告だった。

☆言葉と想いと地域とうちの子たち：古川正史（豊富中学校）

「言葉を発するのは想いを伝えるため」という基本理念のもと、地域の子どもたちにどうやってそのことを体感させていくかの実践を紹介。古川氏が礼文島での教員として考えたこと。観光でやって来る外国人に対して、子どもたちが、自分の住むこの島のいいところを英語で伝えられるような取り組みを進めていく。Ifを使って、晴れた日の見所の紹介、受動態を使って礼文島の美しい花の紹介、関係代名詞を使って、ガイドマップの作成。これらの取り組みは、外国人観光客の受け入れのためだけではなく、それぞれが自分の地域を見直し、

これからどうしていくべきかを考えるよい機会ともなっていることが明らかになった。外国との繋るためだけに英語を学ぶ目的があるのではなく、豊かな生き方を見つけることがこの地域の子どもたちに重要なことだとの想いが共有できたレポートとなった。

☆定時制の英語：松澤 豊（北見北斗高校定時制）

様々な事情を抱える生徒たちの集まる夜間定時制。その中でじっくりと生徒に向き合う指導実践報告。松澤氏は苦手な生徒にも取り組みができるよう、様々な工夫をした授業プリントを用意し、個別指導と課題提出の継続的な取り組みで英語を学んでいくことに向かわせている。数少ないALTとのチームティーチングでは、事前のコンタクトをしっかりと取り合い、苦手な生徒でも意欲が高まるよう、取り組みやすいハンドアウトを使いながら、英語でコミュニケーションがはかれる楽しさを与えられる工夫をしている。授業の原点を再確認できた実践報告であった。

すべての実践報告に共通するのは、「グローバル人材の育成」一本槍の押しつけ政策に対し、目の前のひとりひとりの生徒たちにどんな気づきを与え、力を付けさせていったらいいのかということに真摯に取り組んでいる姿勢だと感じます。急激に推し進められている英語教育への圧力は教員の多忙化に拍車をかけ、無抵抗の従順な人材づくりにつながる危険をはらんでいることも確かめられました。今こそここで学べる理論と実践、そして真の目的を共有し合い、現場での同僚性を高めていく機会を広げていくべきだという思いを強くした分科会でした。